

# 生きる意味

——フランクフルにおける自己実現の思想——

香 川 豊

## The Meaning of Life — Frankl's Theory of Self-Actualization

KAGAWA Yutaka

**Abstract :** Being human beings means being in the face of meanings to fulfill and values to realize. Man is free to answer the questions he is asked by life. And man is responsible for giving the right answer to a question, for finding the true meaning of a situation. In other words, man is responsible for what to do, whom to love, and how to suffer.

Meanwhile, self-actualization is an effect of meaning-fulfillment. If a person sets out to actualize himself rather than fulfill a meaning, self-actualization immediately loses its justification. But on what ground is he justified in assuming that life is, and remains, meaningful in every case?

He takes the stand toward his predicament, in the case where he must face a fate which he cannot change. This is why life never ceases to hold a meaning, for even a person who is deprived of both creative and experiential values is still challenged by a meaning to fulfill. Attitudinal values are the highest possible values. But man is incapable of understanding the ultimate meaning of human suffering, because mere thinking cannot reveal to us the highest purpose. In what ground can we find the ultimate meaning of being?

本稿ではフランクフルが語るロゴセラピーにおける人間像と自己実現の特徴をまず明らかにし、続いて自己実現と超意味の関係を問題にした。それによってかれの超意味の信仰がはらむ問題点を指摘することになる。また間接的にはあるが、かれの語る自己実現の道は、現在の自己実現に対する過剰な期待の危うさを浮き彫りにしてくれるであろう。

### 1. 精神的なもの

フランクフルのロゴセラピーとは「精神的なものからの療法」<sup>1)</sup>であり、精神因（倫理的、精神的な葛藤から生じた）神経症にふさわしい療法として始まった。それは従来の狭い心理療法を補完するものとして構想されており、心理的身体的統一性を越えて第三の精神的なものの次元を付け加え、精神的な人格を中心に人間をその全体性において捉えようとするものである<sup>2)</sup>。人間存在そのものは単なる心身性の平面には現れないの

であり、精神的なものの次元において初めて現象する。つまり、心身の有機体としての自分自身に自ら距離をとり、心身の事実性としての自分自身に関わることに於いて、初めて精神的なものがそのものとして構成され、精神的なものと心理的身体的なものが分節化されるのである<sup>3)</sup>。こうした精神的なものは自然主義が好んで主張するように単に虚構と見なされてはならない。それは生物学主義的に何らかの脳の過程に還元されるものではないし、心理学主義的に一種の心的機構として理解されるものでもない。確かに人間の心身は衝動によって突き動かされている、その限りでは人間の自由は考えられない。しかし精神は衝動に支配されている心身から距離をとり、抵抗することができる。人間は衝動や劣等感に必ずしも屈服することはないのである。精神的なものが心身に対してある態度をとるというこの人間存在の自由性、それはロゴセラピーが基づく第一の概念である。精神的なものと心身的なものとのあいだには間隙があり、前者は実存（Exis-

tenz), 後者は事実性 (Faktizität) に属する<sup>4</sup>。心身的事実性に対立する精神的実存と言う概念こそロゴセラピーの基礎にある人間理解である。

「決定論は心理学の次元の内にあり、自由は精神的次元の内にある。そしてこの次元は独特の人間的な現象の次元と定義されるであろう。……人間の自由は有限な自由である。人間はさまざまな制約から自由なのではなく、ただそれらの制約に対して態度をとるという意味で自由であるに過ぎない。しかし、それらの制約は人間を一義的に規定しているわけではない。なぜなら、その制約に負けるか否か、その制約に服従するか否かを決めるのは、結局その人自身にかかっているからである。つまり、その内で人間が制約を乗り越え、それによって初めて人間の次元へと跳躍するような余地が存するのである。」<sup>5</sup>

人間は、さまざまな境遇や所与の条件に対しても自由であり得る。心身的な内面的環境に対してのみならず、自然的社会的な外面的環境に対しても、人間はその瞬間瞬間において態度をとることができるのである。しかしこうした自由は恣意ではないのであるから、そこには人間存在の責任性がある。生きるとは、後で述べるように人生から問われていること、それに答えること(自分自身の人生に責任を持つこと)に他ならないのであり、ロゴセラピーは自らの態度を決定するという患者の自由に訴えかけ、その存在の具体的意味に自ら突き進むように促すのである。つまり、人間は意味の充足と価値の実現化に対して責任を持つと考えられているのである。人間とは単に性的快楽を追求するフロイト的な「快楽への意志」や劣等感の補償を追求するアドラー的「力への意志」によって支配されているものではなく、自分の存在の意味を追い求める「意味への意志」に貫かれている存在である<sup>6</sup>。「力への意志と快楽への意志……は本来意味への意志が欲求不満に陥るときに初めて現象するのである。」<sup>7</sup>

ところで近代の幕開けとともに、自然科学とそれに基づいた技術が誕生し、19世紀にはそれらが成熟期を迎えることになる。そして成熟した自然科学は自然主義をもたらした。技術は功利主義的な考えをもたらした。これらは今や自明なものと見なされており、自分を単なる自然物と見なすことによって人間に固有な本質を見失い、世界は手段に貶められることになった<sup>8</sup>。確かにこの技術的進歩は物質的により豊かな生

活をもたらした。しかし、それはより豊かに生きるための手段の追求であっても、それが生きる目的を与えてくれるものではない。20世紀になると、やがて自分の本質を見失い、技術の究極的目的がわからなくなった反動として、「自分の存在の自覚……と本来的な意味の再考察」<sup>9</sup>という実存的な問いが起こってくる。つまり、第二次世界大戦を通して、まさにその戦場、強制収容所、防空壕などで、人間の生全体が単なる手段となり、金銭、権力、名声、幸福など人間が所有するすべてのものが熔けてなくなったのである。残ったのは、人間に本来備わっている人間的なもののみであり、あらゆることにおいて決定的に重要なのは人間である、という真実を知ることになったのである<sup>10</sup>。「人間が自分自身について決断する存在者であると想定される場合、人間は自然主義によって終点と定められた、まさにその場所から始まる。」<sup>11</sup>

自らの強制収容所での体験も含めて、こうした歴史的背景のもとで、フランクは人間の精神性、自由性、責任性を説くことで、その「自分の存在の自覚」という実存的な問いに答えようとするのである。では「本来的な意味への再考察」に対してはどのように答えるのであろうか。

人間は、できるだけ意味ある人生を送りたいという意味への意志に基づいて、自分の生きる意味を追求しようとするが、その意味は次のような仕方で見いだされる。

「まず第一に、人間は何かを行ったりあるいは創造したりすることの内に意味を見る。さらに、人間は何かを体験すること、誰かを愛することの内に意味を見る。しかしまた人間は場合によっては、かれがどうしてもなく直面することになる絶望的な状況においてもなお意味を見るのである。」<sup>12</sup>

ところで、フランクは第一に生きる意味への間についてのコペルニクスの転回を要求する。つまり「わたしは人生から何を期待できるか」と問うのではなく、むしろ「人生がわたしに何を期待しているか」と問うべきであると言うのである<sup>13</sup>。われわれは「生きる意味があるか」と問うてはならないのであって、むしろ人生こそがわれわれに問をだし、われわれはその問に答えなければならないのである。生きること自体がこのように問われていることに他ならないからである。第二に、「それぞれの状況はそのつど全く限定さ

れた意味を持っており、その意味はただかれのみに関係し、かれのみを求めている」<sup>14)</sup>のであるから、この独自性と一回性から言って、人生がだす問はそのときそのとき、その人その人によって違ったものになる。それゆえ「生きる意味は何か」と人生の意味を一般的に問うのは何かおかしいことになる。われわれは具体的な状況の要請に対しそのつど具体的に答えて行かねばならないのである。人生が与える問（課題）は、その人だけが果たすべきものであり、その人だけに求められている具体的なものであるから、例えば、今わたしはどのように仕事を成すよう求められているのか、あるいは、誰から何を期待されており、その人のためにわたしは何をなすことができるのか、と具体的に問いながら、その課題に正しく行動で答えて行かねばならないのである<sup>15)</sup>。しかも、どのような仕方であったとしても、われわれは、そのときそのときを意味あるものにするしかないかという二者択一の前に立っており、そのときどきに、人生の問にどのように答えるか決断していく他ないのである。第三に、人生がだす問は「今ここで」問われているのであり、どんな未来がわたしを待ち受けているか知る必要はないのである。なぜなら、どんなことがまだ自分を待ち受けているか、誰にもわからないからである。われわれの生の舞台である世界には出会うべき他の存在者や充たすべき意味がみちており、世界はわれわれによって「充たされることを待っている空位」<sup>16)</sup>のごときものである。それぞれの人はその人格の独自性において、しかも自分の置かれている状況の一回性の内で、その空位を充たすべく意味を実現するよう期待されている。

ところでフランクは「人間は、意味を実現するだけ、また自分自身を実現する」<sup>17)</sup>と考えている。そこで次ぎに意味の実現と自己実現との関係を問題にしてみよう。

## 2. 人間形成の秘密

「天文学において地球中心の世界像が太陽中心の世界像に変わった時期が、哲学において神中心の世界像が人間中心の世界像に変わった時期とぴったりと一致するということは興味深いことであります。……宇宙の中心から投げ出されてしまったと感じた人間は、次ぎには少なくとも精神的な面では今までよりいっそう存在の中心に立とう、神の占めるべき地位に立とうとしたのであります。」<sup>18)</sup>

人間中心の世界像は近代哲学とともに始まる。ハイデッガーが『世界像の時代』で指摘するように、この哲学の流れの中では、われわれは主体（理性）として、何が存在するか、その基準を決定するものとなり、存在の中心に立つことになる。ここでは「唯一の意味発見と意味解明の可能性として理性が偶像化」<sup>19)</sup>されることになるが、「知性の内に、すべてを、最高にして究極的なものを、存在理解と意味理解の排他的な媒介者を見なければならぬと、人が信ずる限り、この偶像化は絶望に至るであろう」<sup>20)</sup>と言われる。事実現在ではこの理性の優位は崩れ、欲望が優位となる。つまり、自分の欲求実現に最高の順位が与えられるようになるのである。現代の若者が自己実現について、「自分の好きなことをする」あるいは「自分のやりたいことをする」と言う場合、たいてい単なる自己の欲求実現を考えていることからこのことが窺い知れる。そして現在の過剰な自己実現への関心は、フランクによると意味への意志のフラストレーションに由来するのである。自己実現はそれ自身が目的にされてはならないのであって、それはあくまで意味充足の結果に過ぎない<sup>21)</sup>。

フランクは人間形成の秘密を次のように語る。

「われわれは世界につうじる道をたどってのみ自分の自我に帰るのである。われわれが自分の不安から自由になれるのは、自己観察やまして自己反省によってではなく、また自己の不安を思いめぐらすことによってでもなく、自己放棄によって、自己を引き渡すことによって、そしてそれだけの価値のある事物へ自己をゆだねることによってである。」<sup>22)</sup>

自己実現は単なるわたしの欲求の充足を意味するものではない。マズロウは自己実現という営みは重要な仕事への関与を通して最もよく実現されると言っているが、フランクも同意見で、そのような仕事や職業などに献身するということが必要ならば、人間の自己実現はその基盤を失うのである<sup>23)</sup>。「自己実現は人間の究極の目的ではない。……自己実現は、もしそれ自身が目的にされるならば、人間実存の自己超越という本質と矛盾する。幸福と同じように、自己実現は結果、すなわち意味充足の結果である。……もし人間が意味を充足するのではなく、自己実現に着手するならば、自己実現はすぐにその正当性を失うことになる。」<sup>24)</sup>

自己実現は、ある物あるいは誰かを志向しつつ、価値ある何かに自分を引き渡し、世界の内て意味を充たして行く結果として実現するものであり、人間の自己超越性と矛盾するものであってはならない。「人間存在は、つねに自分自身を越えて、自分自身でない何かあるものを指示している。……そして、人間は、そのようにして自分自身を超越する程度に応じたのみ、また自分自身を実現する。ある事柄に奉仕することにおいて、または、ある他の人格を愛することによって。言い換えると、人間が完全に人間であるのは本来、ある事柄に完全に没頭し、ある他の人格に完全に献身する場合のみである。そして、人間が完全に自分自身になるのは、自分を無視し忘れるときなのである。」<sup>35</sup>人間はそのように志向的である(或るもののもとにある)分だけ、自分のもとに在る。もちろんこのもとに一あること(Bei-sein)は「決して空間的なものでなく、むしろ《現実的な》」<sup>36</sup>もので、「精神的なものは、一般に自己遂行のなかにのみ、実存が遂行するその現実性のなかにのみある。」<sup>37</sup>「精神的存在のこの根源的能力、この根源の可能性はそれ自体、それ以外の可能性、つまり知覚する・思惟する・語るといった可能性の制約である。したがって、もとに一あることは、決して結果ではなく、いつも既に思惟する・語るといったものの制約であり、したがってまた相互理解や相互了解の制約をなしている。しかし、それはまた想起することや現前化することの制約でもある。」<sup>38</sup>このようにすべての精神作用の根源にある“もとに一あること”は「現存在が主観と客観に分かれる以前」<sup>39</sup>にある事態であり、「存在者は、それを認識する精神的存在者の、決して《外に》あるのではなく、むしろいつでも端的に《現に(da)》ある。そして反省的態度において初めて、……この端的な《現に》一あること(《Da》-sein)が主観と客観に分裂する。」<sup>40</sup>そしてフランクは、この根源的な「もとに一あること」と「反省的態度」を「原意識(Gewußtsein)」と「意識=自己意識」と呼んで区別する<sup>41</sup>。そしてこの原意識は主客分裂以前のものとして無意識である。

「精神的なものは、それが精神的な行為の非反省的な遂行に没頭している限り無意識である。……精神的な行為は客観を志向することができるが、その際自分自身を——つまり主観を客観化しつつ——志向することはできない。したがって反省もできない。」<sup>42</sup>

この非反省的に遂行される「精神的な行為の中心としての人格の本質は、本来純粋な現に行為を遂行していること」<sup>43</sup>であるから、精神はまさに自分自身(精神的深層人格)であるところで、不可避免的に自分自身に無意識なのである<sup>44</sup>。この精神的な人格は「本来のわたし—いわばわたし《自体》」として「単に遂行し得るだけのもの、自ら遂行することにおいてのみ、現に遂行することとしてののみ、《実存する》ものである。」<sup>45</sup>このように本来的な自己は自らを意識することなく、志向的働きとして現にあるような存在である。それゆえ人間実存は、ある物あるいはある人の「もとに一ある」その程度に応じた自分自身を実現する。そしてこの「もとに一ある」という自己超越に基づいて、意味に出会い、それを忘我的に実現して行く、そこに本当の自分が実現するのである。自己実現が意味充足の結果として実現するのであって、それ自身目的にしてはならないと言われるのは、実現されるべき自己が決して対象化され得ない自己であり、目的として意識される自己とはならないものであるからである。

ところで、こうした自己超越は決して言葉で言い表わされない超越者にまで至ると言われる。しかし人間実存にとってそうした超越者との関係がなぜ必要とされるのであろうか。次に苦悩の意味を通してそのことを考えてみよう。

### 3. 苦悩と超意味

意味を充たすこと、それは価値を実現することに他ならない。そのような価値の実現は三つの仕方である。1. 何かを創造したり、何らかの仕方によって世界を形づくることによる価値可能性(創造的価値)。2. 何かを体験すること、つまり世界や存在の美や真理をわたしの内に受け容れることによって成り立つ価値可能性(体験価値)。3. 苦悩すること、運命を甘んじて引き受けることの内存する価値可能性(態度価値)<sup>46</sup>。態度価値の場合は、創造的価値や体験価値の実現が、例えば重度の障害や不治の病によって不可能になったとき、それに対する苦悩を通して正しい態度をとる(それらの価値に固執するのではなく、断念することによって価値実現の可能性がでてくる。創造・体験価値を断念し、態度価値を実現する能力とは苦悩する能力であり、その能力を獲得させるということは医学的精神指導としてのロゴセラピーの重要な課題である<sup>47</sup>)。創造的価値を実現するためには何かある才能を所有していなければならなし、体験価値を実現す

るためには例えばシンホニーを聴く耳と言った器官を所有していなければならない。このような創造することと体験することによる価値実現のためには、創造力や体験能力を所有することが必要であるから、それらの価値実現の可能性はある限定をもっていることになる。しかし、世界や運命を甘受する苦悩を通しての意味実現の可能性はこのような限定を受けない。しかもここでは相対的価値を自己の目的、つまり究極の意味、最高の価値にしないこと（断念）を通して、「苦悩だけが自らの内に包含する最高の意味可能性と価値可能性へ突き進むこと」<sup>38)</sup>ができるのであって、そこでは単なる一つの価値実現の可能性ばかりでなく、「最高の価値を実現する可能性、最も深い意味を充たす機会が問題なのである。」<sup>39)</sup>態度価値はこの意味で創造的価値と体験価値を越えている<sup>40)</sup>。

ところで、苦悩する力（Leidensfähigkeit）をわれわれは生まれつき持っているわけではない。われわれはまずそれを獲得しなければならない。獲得することによって運命的なことを正しい態度で克服することができるようになるのである。この内的克服は、外的な形をとらないが、それでも自己形成である<sup>41)</sup>。人間存在は「決して端的にそれであるところのもので《ある》のではなく、むしろそのつどそれを決断する存在である。……このように人格の存在が決断する存在なら、性格は形成された存在である。……遺伝と環境が人間を形成するだけでなく、人間はまた自ら何かをつくる。……一人の人で《ある》人格が、一人の人が《もつ》性格と折り合いをつけることによって、そして人格が性格に対して態度をとることによって、人格は性格ならびに自分を絶えず改造し、人格性へと《なる》。」<sup>42)</sup>苦悩は実行することであり、また成長することである。しかもまた自らを越えて成長する人は自分自身へと成熟する<sup>43)</sup>。

「成熟は、外的な依存性にもかかわらず、人間が内的自由で達するというに基づいている。」<sup>44)</sup>例えば強制収容所のような極限状況においては、われわれは自分に押し付けられた条件や境遇に依存することになる。創造的な価値や体験価値を実現するとするとそれらに制約され、依存的であらざるを得ないが、このような外的状況に対してどのような態度をとるべきかという態度価値の実現に際しては自由である。「あらゆる条件や境遇《から》自由であり、運命の内的な克服に《向かって》自由であり、正しい、毅然とした苦悩に《向かって》自由である。このような自由はもはやいかなる条件も知らない。それは《いかなる境遇のも

とで》でも自由であり、そして最後の息を引き取るまで続くような自由である。それゆえ、極端な状況は人間を内的自由にいたらしめるだけでなく、人間をまた内的成熟にいたらしめる。」<sup>45)</sup>このことは言い換えれば、「人間存在は最も深いところでは、また究極的には、受難（Passion）である。またそれが人間の本質である。つまり苦悩する者、ホモ・パティエンス（Homo Patiens）であるということである。」<sup>46)</sup>

フランクフルトによると、この三世紀というものの苦悩を回避する逃避主義によって現実を言い繕い、能動性と合理性という二つの偶像の背後に隠れて真実から遠ざかってしまった。苦悩とその必然性、苦悩の価値の可能性は知られることはなかった。能動（actio）と理性（ratio）の助けをかりて、苦しむことや死ぬことを片付けてしまおうとして、われわれは自分自身とお互いをだましてきた。能動を越えた受動を見逃し、現存在が受難であることを忘れたのである。この忘却のもと、理性や理性的人間、ホモ・サピエンスの神格化が生じるのである<sup>47)</sup>。この啓蒙主義以来のホモ・サピエンスに対しかればホモ・パティエンスを対置しようというのである。人間は本質的にホモ・パティエンスであり、苦悩を通して内的に成熟して行くことはいかなる状況のもとでも可能であり、態度価値の実現は最後の息を引き取るまでその機会を失わない。換言すれば、自分の人生を意味あるものにしたいという意味への意志は、苦悩の中で人間を支え続けているのである。しかし存在するものはやがて滅び去ってしまう儚いものである。そうすると苦悩を通して意味を充実して行くことは死によって無意味なものになりはしないか、という疑問が起こる。それに対しフランクフルトは次のように主張する。

「過ぎ去って行くのは本来可能性だけ、価値実現の機会だけ、われわれが創造や体験や苦悩（実際に変えることができないもの、真に運命的なものに対する正しい、毅然とした苦悩）のために有している機会だけである。そしてわれわれがこれらの可能性を実現するや否や、それらはもはや《過ぎ去る》ものではなくなる。むしろそれらは《過去になったもの》であり、過去としてあるものである。それらはまさに過去存在というあり方において保存されているからである。それらはまさに過去存在として《存在する》と言ってよいであろう。なぜならそれらはまさにその過去存在において保存されているからである。それゆえ、もはや

何ものもそれらを害することはできない。一度生じたもの、一度過去になったものは、もはやこの世から追放されることはできない。一度過去になったもの、それは一回限りでかつ《永遠に》過去になったのである。』<sup>48</sup>

人間の肉体的な死の後でもわれわれが実現してきたものは残る。それらは過去存在の内に保存される。「あらゆるもの、われわれの人生の全体、われわれの創造や愛や苦悩の全体が世界の調書の中に収録されている。……世界はわれわれが解読しなければならない(また解読することもできない)草稿ではない。世界はむしろ、われわれがそこに書き記さなければならない調書なのである。』<sup>49</sup> このように人生で実現したことは過去存在として永遠化される。しかしわれわれはなお、世界は全体として意味を持ち得るのか、という最後の問を発することができる。これはわれわれが苦悩に耐えることの究極の意味を問うことでもある。

「すべてのものは結局無意味である」とする考えと「すべてのものは有意味である」という考えは、論理的には何れも正当性をもつ。なぜならわれわれは全体を見渡すことができず、全体の意味はわれわれの理解力を越えているからである<sup>50</sup>。全体の意味は証明できない<sup>51</sup>。もちろん、すべてのものが無意味であるとする、われわれはニヒリズムに陥ることになる。しかしフランクによつて、全体は有意味を越えている(übersinnvoll)という意味で超意味(Übersinn)をもつと信じることはできる<sup>52</sup>。さらにこの超意味を信じないことは無意味であるばかりでなく傲慢でもある。なぜなら「すべてが無意味であると仮定することは、自分の実存が意味付与の唯一の審級であり、(たとえそのような意味を与えることに失敗しても)唯一の意味保有者であるというもう一つの仮定を含んでいる」<sup>53</sup>からである。全体の意味充実を見通すことができないということを引き受けるということが現存在に本来属しており、超意味を信じるのが意味をもつだけでなく、「超意味の信仰が意味である。」<sup>54</sup>

#### 4. なお残る疑問

どのような意味ですべてが超意味を持っているのか、われわれは知らない。この無知を越え、それへの信仰を決断するとき、われわれは無の深淵の前に立つことになる。しかもわれわれの意味実現の行為は、そのつど具体的な状況において、人生が提出する間に具

体的に答えて行くところに成り立つ。そうするとわれわれは超意味の地平から再び時間の内に戻り、時間の内で創造したり、体験したり、苦悩したりすることになる。しかし超意味の地平に越え出るということは、超越者との関わりの余地を残すということでもある。フランクは無意識の精神的な深層人格に無意識の宗教性を認めるが、超越者の存在は、われわれが時間の内で関わる価値を絶対化しないという意味で重要な位置を占めるのみならず、超越者への自己の関係性の体験は運命的な限界状況において、われわれを支え、守ってくれるという治療上の意味も持つ<sup>55</sup>。われわれが具体的状況の内で関わるのはあくまで相対的価値の実現であり、その実現は超意味とは違いあくまで人間の業に属するものである。そうすると、この世界でわれわれが充たす具体的価値はすべて相対的であるということになるが、その場合に、もし超越者の存在がないとするならば、ドフトエフスキーの言うように「すべてのことが許されている」ということになりかねない。こうしたニヒリズムはまた許されるべきものではないのである。フランクは、神の存在を遠近法における消尽点にたとえ、消尽点は、それ自体としては絵画の中に現れず、絵画の中に全く与えられていないにもかかわらず、その絵画を構成しているように、諸々の価値がそれへと収斂する構成的で超越的な一なるものとして、神は所与ではないが、何らかの仕方で与えられていると言う<sup>56</sup>。超意味の信仰、それはかれにおいてニヒリズムに陥ることなく本来的な自己を実現しようとする実存の一つの可能な道ということになる。ただ非宗教的な人は何らかの仕方で与えられている構成的で超越的なものを事実として受け取ることに躊躇することであろう。フランクは超意味も含めてこうしたものに対する信仰への決断を語るが、超意味は本来人間の業に属するものではなく、それは決断というわれわれの業とは関係なく成立しているものではないであろうか。超意味や超越者の存在が事実そのものを言い当てているということがなければ、その決断は不確かなものをただ信じるということになり、そのような実存的決断に必要以上の価値が置かれることになろう。とくに非宗教的人間にとっては、その信仰が何か大変無理な決断(冒険)を迫るように見えることは確かである<sup>57</sup>。しかしそうとはいえ、超越者のわれわれに対する隠れた関係性というかれの主張は、重要な意味を持つであろう。フランク自身のみでなく最近の例ではマザーテレサの生きる姿の中にかれの主張の正しさを見るのは筆者だけではないように思うからで

ある。われわれを越えたものが個体を通して創造的に働くというこうした事実がある限り、かれの主張は本来的な自己実現の一つの重要な道と言わねばならないであろう。

ところで意味の実現に当たり、人間は自らを放棄し、認識しつつ愛しつつ自分を捧げるために他のもののもとにあると言われるが、こうした自己放棄や献身が自己の評価を高めるためというエゴから出てくることもある。こうしたエゴイズムをフランクルはどのように克服し得ると考えているのであろうか。

確かにかれの語る自己放棄には、エゴの放棄という意味が含まれているが、しかし無意識的な深層人格としてのわれわれは、はたしてそれを徹底的に免れているのであろうか。かれが語る良心の超越についての考察からその点を探ってみよう。

「意味を探し求める際に良心が人間を導く。一言でいえば、良心は意味—器官である。良心とは、意味ゲシュタルトを具体的な人生の諸状況において知覚する能力であると定義できる。しかし良心は人間を誤らせないと限らない。」<sup>58)</sup>それゆえ、われわれは良心を洗練させるよう心がけなくてはならないし、世界を意味にみちた全体として知覚するよう努め、その全体的意味ゲシュタルトを完成させるため具体的な意味を実現するところに自分の存在の使命を認めるということが重要になる。

ところで非宗教的な人も内在的・心理的事実としての良心を持っている。しかしかれらはそこに止まり、それ以上問おうとはしない<sup>59)</sup>。良心は責任がそれに向けられるべき究極的なものではないのであって、良心は「最後から二番目のもの」<sup>60)</sup>なのである。それに対し宗教的人間にとって、良心自身はむしろ「超越者の声」<sup>61)</sup>であり、人間は自分が発したものでないこの声をただ聴き取るだけのものなのである<sup>62)</sup>。「もし良心が超越者たる汝からの言葉でないなら、それは決して内在的なものの内で権威ある言葉にはなり得ないだろう。」<sup>63)</sup>良心が超越者への聴従であるなら、意味—器官としての良心は、超意味へと超越し、それへの信仰のもと、意味に充ちた全体を完成させるため、価値あるものの実現に自己を棄てて取り組まなければならない。しかし良心の洗練と言われるように、いつも完全に超越者の声に聴従するとか、具体的状況において意味ゲシュタルトを全体的に知覚するというのではないのであるから、われわれは有限で不完全な者としてそういう力を育てて行くことしかできないということになる。しかしそのことは、それに際してのわれわれの

自己放棄が完全なものでない場合があるということになる。確かに精神的な深層人格は無意識的なものであり、自己意識という意味でのエゴはない。しかし具体的状況での意味実現に際しては、それが人間の業である限り、仏教の唯識論が語るように深層での無意識的な自己への執着をなくすことは容易ではないであろう。フランクルは精神的な深層人格は無意識的なものであり、超越者はそれを支え、それを通して働くと考えているが、エゴが深層にまで及ぶということには言及していない。おそらく深層での神人関係においては、われわれはその恵みをただ受け取る器に過ぎず、原理的にそうした関係にエゴが介入するとは考えられないからであろう。もちろん超越の側から見る限り、そうした関係は人間の業の次元を超えており、そこでエゴが働く余地はない。しかし、その関係を受けてわれわれが今ここで忘我的に働く場面では、エゴが忍び寄る可能性は排除できない。それを排除するためには禅の修行のようなエゴを完全に殺すという過程が必要であろう。しかしそのような過程を精神療法と呼べるのかどうか筆者にはわからない。

#### 注

- 1) Frankl, Viktor E., Theorie und Therapie der Neurosen, Einführung in Logotherapie und Existenzanalyse, 8. Aufl., Reinhardt, München Basel 1999, S. 141. (以下 TTN と略し、ページのみ記す。)
- 2) Frankl, Viktor E., Der unbewusste Gott, Psychotherapie und Religion, 8. Aufl., Kösel, München 1991, S. 20. (以下 UG と略し、ページのみ記す。)
- 3) フランクル著 (霜山徳爾訳), 『神経症Ⅱ その理論と治療』, みすず書房 2002 年 100 ページ参照。
- 4) UG, S. 18.
- 5) Frankl, Viktor E., Der Wille zum Sinn, Ausgewählte Vorträge über Logotherapie, 4 Aufl., Piper, München Zürich 1991, S. 156. (以下 WS と略し、ページのみ記す。)
- 6) Vgl. WS, S. 114.; TTN, S. 144–S. 115. Frankl, Viktor E., Der leidende Mensch, Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie, 2. Aufl., Verlag Hans Huber Bern 1984, S. 183. (以下 LM と略し、ページのみ記す。)
- 7) WS, S. 19.
- 8) WS, S. 86.
- 9) WS, S. 86–S. 87.
- 10) WS, S. 88.
- 11) WS, S. 88–S. 89.
- 12) WS, S. 29.
- 13) Frankl, Viktor E., . . . trotzdem Ja zum Leben sagen : Eine Psychologie erlebt das Konzentrationslager, 20. Aufl. Deutscher Taschenbuch Verlag, München 2000, S. 125. (以下 JLS と略し、ページのみ記す。)
- 14) WS, S. 30.

- 15) Vgl. JLS, S. 125, S. 128–S. 129.
- 16) Frankl, Viktor E., *Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse*, 10. Aufl. Franz Deuticke Wien 1982, S. 17. (以下 ÄS と略し, ページのみ記す。)
- 17) ÄS, S. 77.
- 18) フランクル著 (佐野利勝, 木村 敏訳), 『識られざる神』, みすず書房 1962年 192–193 ページ。
- 19) LM, S. 227.
- 20) *ibid.*
- 21) Frankl, Viktor E., *The Will to Meaning: Foundation and Applications of Logotherapy*, Meridian Book 1988, p. 38. (以下 WM と略し, ページのみ記す。)
- 22) フランクル著 (宮本忠雄, 小田 晋訳), 『神経症 I その理論と治療』, みすず書房 2002年 176 ページ。
- 23) WM, p. 38.
- 24) *ibid.*
- 25) ÄS, S. 160.
- 26) LM, S. 87.
- 27) LM, S. 119.; Vgl. UG, S. 23.
- 28) LM, S. 90.
- 29) LM, S. 86.
- 30) LM, S. 90.
- 31) LM, S. 135.
- 32) LM, S. 134.
- 33) UG, S. 23.
- 34) UG, S. 24.
- 35) UG, S. 23.
- 36) LM, S. 202–S. 203.
- 37) TTN, S. 179.
- 38) LM, S. 203.
- 39) TTN, S. 180.
- 40) LM, S. 203.
- 41) *ibid.*
- 42) LM, S. 203–S. 204.
- 43) LM, S. 207.
- 44) *ibid.*
- 45) *ibid.*
- 46) LM, S. 208.
- 47) LM, S. 209.
- 48) WS, S. 49–S. 50.
- 49) WS, S. 52.
- 50) LM, S. 200.
- 51) LM, S. 201.
- 52) *ibid.*
- 53) *ibid.*
- 54) *ibid.*
- 55) WS, S. 73–S. 74.
- 56) WS, S. 67.
- 57) Vgl. UG, S. 49. 一非宗教的人間にとって神や超意味が事実として与えられているかどうか, ということがこの場合の最大の問題であろう。フランクルの消尽点の例で示されるように, それは普通の存在者のような与えられ方をしない。しかし宗教的な体験の事実としては与えられ得るものであろう。それは発見されたり, 何かその本質性が問われるようなものではないが, ただ事実性 (Daßheit) において与えられるもので, そこには生として信仰を生きている者が求めることの真実性 (求められるたものとして与えられている) があるとフランクルは考えている。(WS, S. 70.)
- 58) WS, S. 26.
- 59) UG, S. 48.
- 60) UG, S. 49.
- 61) UG, S. 46.
- 62) *ibid.*
- 63) UG, S. 52.